

阪神港CONPAS

第2回試験運用開始

神戸港PC-18で

【関西】阪神港（神戸港、大阪港）での新・港湾情報システム（CONPAS）導入に向けた第2回試験運用が23日、神戸港PC-18の上組コンテナターミナルで始まった。ダミーのコンテナを用いた前回と異なり実際の輸入実入りコンテナを用いた試験で、9月3日まで実施する。

試験には海運貨物取扱事業者5社、海上コンテナ輸送事業者10社、車両27台が参加。輸入実入りコンテナ使用、参加店社の拡大、複数日実施と、初回よりもより本番に近い想定で運用する。

初日は午前10時すぎにトレーラーヘッドがゲート前に到着、輸入実入りコンテナを搬出した。今回は将来のCONPAS専用レーン設置を想定し、待機列最後尾からゲート到達、入場処理手続きまでの総待機時間の削減効果を検証する。



神戸港PC-18で始まったCONPASの第2回試験運用

運用面では、海貨業者がターミナルのウェブ予約システムから搬出予約番号を取得し海上コンテナ

ナ輸送事業者に引き取りを依頼。また海上コンテナ輸送事業者も時間予約枠を登録するなど、各事業者が実際に商用ベースでCONPASを用いる。

機能面では、画面上に表示される地図でゲート前渋滞情報を確認できる機能や、輸送事業者配車係向けにGPS（衛星利用測位システム）位置情報で自社車両の位置情報やコンテナ情報を画面表示する機能も新たに実装した。

阪神港のCONPASでは、ドライバーは専用

機能面では、画面上に表示される出入管理情報システムを介して得られた、ヤード内行き先情報に沿って蔵置場所までヘッドを移動。そこでシャシを実入りコンテナを積んでゲート外に搬出する。

CONPAS導入は、国土交通省近畿地方整備局と阪神国際港湾会社が事務局となる検討会で2月に試験運用の開始方針が示され、3月にPC-18で第1回を実施した。神戸港のほか、今後は大阪湾夢洲コンテナターミナル（DICT）でも実施する見通し。